第二章　廣井博士の逸話

(1)　袋だゝきの後の祈禱會

或るクリスマスの夕であつた。平常から厭な奴として嫌はれた數學の教師があつた、其夕も彼は酒を飲んだか、大きな聲を出して歸つて來た、外には雪が一面に降り積つて居た、平常の鬱憤が一時に爆發して學生は其の教師を雪埋めにしてさん〳〵の目に會せた。彼等は息を喘ませ眞赤な顏をして宛ら凱旋した軍兵の樣に躍り上つて宿舍の燈下に集り歸つて來た。其所に何處からか歸つて來たのかヤングスト・ボーイと呼ばれた博士であつた。博士は一座を睥睨し、

『苟くも基督教徒たるものが何故そんな行動をしたのか、』

言葉少い若年の博士の前に今迄の荒くれ男が、すつかり後悔し、果ては懺悔と祈禱の會となつてしまつた。

『私は其樣子を見て可笑敷くてたまらなく、今に忘れない』と嘗て內村氏が語つた事がある。內村氏は『廣井にはそうした所のあつた男だ』と話を結んだ。

(2) 乘馬の練習と牛乳

札幌農學校時代の學生には、種々の意味で乘馬の必要があつた。博士も學生時代には乘馬が好きで馬術も仲々巧みだつたが、僅かの小遣錢にも困つてゐた時代だから、馬を借りる金を得る爲には中々苦心したものである。

元來札幌農學校の生徒は開拓使から一切の費用を支給されてゐたのではあるが、小遣錢としては一週僅かに金二十錢しか支給されなかつた。それで學生達には、何か勞働をすれば多少の金がとれる樣な途が設けられてゐた。博士は毎朝早く起床して牧場に往き、乳牛を洗滌する事を仕事としてゐた。此の仕事は一週二十錢になつたが、これこそ博士の爲には唯一の乘馬の資であつた。然しこれとても他の學生と早起の競爭で飛び出さないと、仕事にありつけぬと云ふ風であつた。

博士は斯うして得た二十錢を以て乘馬の練習をしたのだから、練習が眞劍で、後年乘馬術に熟達したのも當然な事と思はれる。然し東京在住以後は曾て博士の乘馬姿を見る事はなかつた樣である。

話は別になるが、博士は決して牛乳を飲まなかつた。夙に歐米の文明に接し且つ長い間の海外生活によつて西洋流に親んだ博士が、牛乳を飲まなかつたと云ふのは一見不思議の樣な話ではあるが、是は寧ろ博士にとつては當然すぎた事かも知れない。乳牛の脚洗ひをした學生時代に、親しく牛乳搾取の狀態を見て、其が非常に不潔なものだと思ひ込んだ先入感が、一生拔け切れなかつた故である。それでも必要止むを得ない場合には罐入りのミルクを使つた。

(3) 取りすました落馬振り

札幌農學校教授時代、博士はよく學生と乘馬旅行をやつた。其頃はまだ自轉車すらなく、汽車はあるとは云ふものゝ極一部分に限られてゐたから、馬が唯一の交通機關であつた。其上道廳では盛んに馬の飼養を奬勵してゐたので、北海道開拓に心を寄する者は、大いに馬を利用する事に努めた。博士も此の趣旨を帶してゐたと見え、旅行は何時も乘馬と決つてゐた。

或時博士は學生と乘馬旅行に出掛けたが、途中博士の乘馬が突然何物かに驚いて飛び跳ねたため、博士はどつと地上に拋り投げられた。後に隨つた學生達が驚いて、怪我でもされたのではないかと、傍へ寄らうとすると、博士は悠々と起き上つて、平氣な顏で又其馬に飛び乘り、今落馬した事も知らぬげに歩み出した。當時博士はまだ一介の青年教授であつたが其落付き拂つた態度には學生一同舌を卷いたものである。

(4) 豪膽な乘馬振り

明治二十四年北海の天地猶半ば氷雪に鎖された初春の頃、博士は騎馬で學生四人と室蘭方面に修學旅行を試みた事があつた。當時、北海道旅行者は驛傳から驛傳に乘馬を乘り捨てゝ次の日は又新らしい馬に乘り換へると云ふ風であつた。

博士の一行は札幌を出發し强行を續け深夜に至つて漸く苫小牧驛に一泊、室蘭の視察に向つたが、其歸途白老と云ふ驛に一泊し、翌日の馬を宿に命じた。此頃博士は、札幌農學校教授にして同時に北海道廳の土木課長を兼ね、驛傳の管理もやつてゐた。

扨て翌朝出發と云ふ時になると、馬が揃はない。漸く四頭だけは引いて來たが、尙一頭だけ不足であつた。

『驛傳に馬がないと云ふ話があるものか』と博士も幾分不滿に思つたが仕方がない。學生達から嚴重な談判を受けた宿屋の亭主は、土木課長殿の一行と知つて大いに恐縮したが、いくら恐縮しても居ない馬を出す譯にはいかないので、今は斯うするより仕方がないと、牧場に放してあつた種馬を押へて來た。種馬は氣性の荒い上に體も大きく、普通乘馬には用ひられないものであるが、亭主も窮餘の一策として止むなく申し譯に引き出したものである。亭主は

『やつと一頭見付けて參りましたが、御覽の通りの荒馬ですから、とても差し上げる譯には參りません』と、博士に斷はられるのを待つてゐる樣な風であつた。然し荒馬でも仕方がないと云ふので、一行はそれで出發する事になつた。

近所の百姓達は、土木課長の一行が種馬を引き出したと云ふ話を聞いて、一體どんな人があの荒馬に乘るのかと、面白半分に見物に集つて來た。學生達は順々に馬に乘つて最後に種馬が殘された。博士はマドロスパイプを咬へて默々と種馬を見てゐた。亭主は頻りに詫を云ふ。

『いゝよ』と一言亭主に云つて、博士はヒラリと種馬に飛び乘つた。亭主は馬の手綱をとつて、口許を確と押へてゐたが、馬は前足を高く擧げて後足で立つた。一同は固唾を呑み手に汗を握つて見てゐたが、博士は手綱を引き締めて鬣をぐつと摑んだ。馬は一層跳ね上つた。

『放しますよ』と亭主が念を押す。

『よろしい』と博士は徐ろに云つた。

亭主にとられてゐた口許が放されると、馬は宛ら怒り狂つたものゝやうに奔り出した。十餘哩も一直線に續いてゐる平坦なる道路を砂ほこりを立てながらまつしぐらに走つた。馬上の博士は實に鮮か

な馬術振りを見せて馬を制御して行く、一高一下、鞍上人なく鞍下馬なしとは此事でもあらう。やがて馬は疲れた。さしもの荒馬も、豪膽なる博士の馬術には到底敵すべくもなかつた。馬上の博士の姿が遙かの地平線上に小さくなつた頃、四人の學生も其後を追つて馬を進めた。今まで我を忘れて馬と人とを見送つてゐた見物の百姓達も、しばらくは其處を去らうともしなかつたが、やがて或者は博士の鮮かなる乘馬振りを賞讃し、或者は驚歎の叫びを發し乍ら歸りかけた。

學生連は途中一泊して翌日札幌に歸つたが、博士は既にその日のうちに札幌に戻つてしまつて、『ウン、あのまゝ戻つてしまつた』と、平然として四人の學生達を迎へた。

博士の見掛けに依らぬ剛膽な乘馬術は、以來非常な評判になつた。

(5) 教授は最高の使命

明治二十三年頃の事であつた。或日獨逸の艦隊が小樽に寄港して司令長官某將軍は、幕僚數名を隨へて札幌に來り、北海道廳を訪問した。處が困つた事には適當な通辯がない。そこで時の長官たりし陸軍中將永山武四郎氏は、早速使を農學校に走らせて廣井博士を呼ぶ事にした。當時博士は獨逸留學から歸朝したばかりの青年教授として、風丰態度も立派なものであつた。

永山長官からの急使某書記は、恰度授業中であつた博士の教室に飛び込んで、長官からの命を傳へたが、折しも建築學の講義中であつた、博士は、

『今授業中です』

と唯一言答へたまゝ、あとは平然と講義を續けるのであつた。

使の書記は、その態度に面喰つたが、博士はどうしても取合はないのだから仕方がない。電話室へ行つて道廳へ電話をかけてゐたが又出て來て、獨逸艦隊司令長官の來訪した事から、通辯がなくて困つてゐる事を述べ、長官の依賴だから早速道廳に來て貰ひ度いと繰返した。が博士は取合はなかつた。

此の有樣を見た學生は、丁度六ケしい問題に惱されてゐた時なので、早く博士が書記と共に道廳へ行つて呉れゝば好いがと思つてゐた。博士は書記に向つて、

『今授業中です』と力を入れて繰返した。すると書記も幾分氣に障つたらしく、

『それは分つてゐます。然し長官からの御命令なのですが、それでも宜しいのですか』

『行けません』

博士は力强く云ひ放つて、二人の學生に向つて講義を續けた。書記も遂に憤然として出て行つてしまつた。

博士が道廳へ行かないので、學生は尠からず失望したが、然し博士に對する尊敬の念は、以來益々高まつたと云ふ。此の時の學生は十川嘉太郎、小野常治の兩氏である。

(6) 火事場の危急

これも其當時の事、或夜近所に火事が起つて、あたり一帶は紅焔の包む處となり、住民の危難は文字通り焦眉の急に迫つて、わめきふためく樣悲慘を極めた事があつた。

その切迫せる住民の危難を見た博士は、これを救はうとして、さながら何者か犯すべからざるものに命ぜられたかの如く、敢然と火事の現場に走り寄つて、警戒線を突破して炎々たる火焔の中に進入せんとした。けれども警戒中の巡査は博士を遮つて入らしめない。博士は警戒線と知りつゝも、他人の危急を傍觀するに忍びず、警戒の巡査を押しのけて、遮二無二線内に突入せんとする。お互に理窟を一言云ふのでもない、只默々として難に赴かんとあせり、一方は入らしめまゝと努めるのである。然し巡査も博士の身分を知つてか知らずにか、荒い言葉を使ふでもなく又强いて腕力を奮つてまで博士を追ひ出さうともせず、博士と巡査とは無言の儘、お互に自我を沒却して一方は住民の危難を想ひ、他は民衆の一人なる博士の一身を氣遣つて、長い間汗だくだくとなり押し合ひ揉み合つてゐたと云ふ事である。

(7) 正義の前には何人をも恐れず

結婚の時、博士は札幌から伊豫の松山まで出かけて綱子夫人を迎へに行つた。夫人を同伴して札幌へ歸る汽車の中で仙臺邊近くのことである。同車してゐた一西洋人が平然と喫煙を始めた。博士はツカツカと外人の前に進み寄り、

『歐洲文明國の紳士たるものが、ノー・スモークの室内で、然も淑女の前で喫煙するのは失禮ではありませんか』

と流暢な英語で注意したので、外人は赤面恐縮した。博士の斯かる正義の念はすでに學生時代に現はれてゐた。博士が常に尊敬してゐる米人教授に對してすら、學生の名譽の爲に正義の熱辯を吐いた事は既に本傳に於て述べた處である。

(8) 明日を依賴しない人

北垣國道氏が北海道長官たりし時に、廣井博士は氏を案内して空知平原の土木事業を巡視した。若い一人の技師が天幕生活をしながら其所の河の閘門工事を監督してゐた。

北垣長官は博士と共に其天幕内に行つて愉快さうに仕事をしてゐる青年技師に向ひ、

『面白さうだね、君は幾歳になるね』

『恰度です』

『恰度と云ふと三十歳か、良いねえ、私はもう倍だ』

平素寡言な博士は此の二人の問答を聞いて居たが、何と思つたか突然、

『人間は明日の事が分りませんからなあ』

と言つた。博士が他人の對話中に言葉を挿むと言ふ事は珍らしい事であつた。

北垣長官も是には何と應へ様もなく

『それもそうだなあ』と言つたのみだつた。

博士は唯其日の最善を實行した人であつた、決して明日に依賴する人ではなかつた。

『今日の事は今日にて足れり』と云ふ信仰の人であつた。

(9) 馬方を叱る

札幌苗穂村の博士邸の前は、札幌市から郊外に通ずる廣い街路であつた。博士の書齋から街路の交通は能く見えた。

荷馬車の馬が疲れて動かない様な時に、馬方が之を撲つたり叩いたりする事があると、博士は邸内から走り出て、非常な聲で馬方を叱つた。此時の博士の聲は實に異常な激越な様子に見られた。どの馬方も博士の見幕に驚いて了つた。こんな事が度々あつて附近の馬方は自然と博士の眞意を解する様になり、馬を虐待する習慣を改めるものが多くなつた。

平素は家庭に於ても、人を叱つたり、大聲を發したりする博士ではないが、動物を虐待する人に對しては常に猛烈な反省を促したのである。

(10) 蕎麥會

博士が築港事務所長として函館や小樽の築港工事を擔當してゐた頃、よく部下を集めて談話會を開いた。そんな時博士は蕎麥、鹽煎餅、南京豆等の簡單なものを求め、共に之を食べながら談笑するのを常としてゐた。決して之が爲に多額の金錢を費す事はなく、極めて質素なものであつたが、一面に又極めて親愛に滿ちた會合であつた。特に此の蕎麥の會食は此の談話會の代名詞となり、今も北海道には蕎麥會の名を記憶してゐる人が多い。

(11) 慧眼

日露戰爭當時、北海道では、津輕海峽が敵艦の爲に封ぜられて、內地との連絡を切斷されると云ふので大騷ぎをした。小樽の築港事務所でも當時はその噂で專だつたが、敵艦が本當にやつて來たら一體どうせうと云ふ事にまで話が進んだ。その時博士は例の口ぶりで、

『君等は、平常の無駄屁を揃へて敵艦に向つて一齊射擊をやるさ』

と、事もなく云ひ放つたので、今まで眞面目に考へてゐた人々も遂に大笑ひをしてしまつた。その後晩飯の時、又戰爭の話が出て、旅順港の事にも及んだが、その時博士は、

『旅順港なんざあ譯もない話さ、ボロ船にコンクリートを積んで港口へ持つて行つて沈めてしまへば良いんだ』

と冗談のやうに語つて一同を笑はせてゐた。處がしばらくして我海軍がそれを事實に行ふに至つたので、今迄博士の話を冗談のやうに思つてゐた人々は尠なからず其慧眼に驚かされた。

(12) 勞務を尊敬

博士が何か工事を擔當するとなると必ず率先して其の第一線に立ち、請負人がやる以上に細い處まで徹底的に工夫、改良、段取等を實行して見せた。請負と謂ふものは此位に爲さねばならぬもの、監督者と謂ふものは、此の位に爲さねばならぬもの、と、博士は常に實際の行を以て敎へてゐた。

小樽築港工事を擔當してゐた博士は、未だ年も若い元氣も旺盛な時であつた。

朝は人夫などよりも早く現場に出で、夜は人夫よりも遲くまで事務を執り、恰も請負人の世話役か何かの如く立働き、決して雇はれてゐる人だとか、官吏だとか云ふ樣子はなく、又は尊大ぶるなどゝ云ふ事は少しもなかつた。

當時淺野總一郎氏が小樽築港工事を視察し、半ズボン姿で甲斐々々しく混凝土を練つてゐた博士を見て、是は將來恐るべき人だと直に其人物に惚れ込んで仕舞つた。爾來淺野翁が博士に對して敬意を表することには特別のものがあつた。博士の訃を聞いて逸早く駈け付け、其遺骸の前で何とかして再び生き返らせる方法はないかと叱る樣にせき込んだ位である。

(13) 工費の抽出

北海道石狩川の改修工事は、メイク技師が計畫をたてたが、金がなくて實施するに至らず數年來そのまゝになつてゐた。博士が時の長官を說いて最初の年度に六十萬圓の豫算を出させる事にした。處

が其所へ渡邊兵四郎氏がやつて來て、博士が便所へ立つた後で『六十萬や其處らぢや出來るものでない、廣井の案などは駄目だ』と云つてしまつた。

後で博士は渡邊氏に向つて

『君はなんだつてあんな馬鹿な事を云ふんだ。やつと說き伏せて六十萬圓の糸口をつけたのに、あんな事を云つては打壞しではないか、長官の頭をもとに直し給へ』

と叱り飛ばしたのであつた。豫算を抽き出す爲に博士は斯うして不斷の苦心を拂つてゐた。

(14) 奇智

博士が大學の敎授であつた頃、外國の或る名士が來て大學を參觀した事があつた。博士が其名士を案內して工學部の製圖室の前まで來ると、中から突然デカンシ■の合唱が流れ出して來た。卒業製作に疲れた學生達が、どら聲を張り上げて歌ひ出したのである。

外國の名士は怪げんな顏をして、

『あれは何の聲です?』と博士に尋ねたが、まさか學生だとも云へず、

『いま敎室の內部を修繕してゐるので、あれは其土方が歌つてゐるのです』咄嗟に斯う答へたので、其名士も成程と肯いて別に氣にもとめなかつた。後で博士から此事を聞いた學生たちは、何れも赤面して、つく〴〵身に沁みたと云ふ。

(15) 無愛想

八田嘉明氏は明治三十六年東京帝國大學を卒業し、東京市に職を奉ずることになつた。それで或る日、同鄉の友人と共に本鄉の博士宅へ挨拶に出掛けた。その友人が『大變好いお天氣ですね』と云ふと、博士は素氣なく『あゝ晴れてゐるから天氣は好いよ』と云つたきり頗る御機嫌を損じて仕舞つた。二人共度膽を拔かれたかたちであつたが、それでも學校出たての元氣な時代だから、委細構はず大言壯語して自分の抱負を述べ立てた。博士は默つて聞いてゐたが、やがて、

『君、そんな事を云つても駄目だ、極く小さな一つの仕事を一生涯かゝつて仕遂げるのでもなか〳〵困難な事だ』と諭すのであつた。八田氏が後年鐵道次官となつて多くの部下を統御する時にも、よく此の談を若い人達に語り聞かせたものである。

兎も角『一人の人間に一つの仕事』と云ふのが博士の抱いてゐた主張だつた。

『人間は一人が一つの仕事を遂行すればそれで好い。どんな小さな仕事でも自分で考へてやる事は人

生の立派な仕事である。各々が一つの專門に成功することは、それが國家の爲にも立派な事だ。數千萬の人間が皆一つの技能に達成したなら、國家の爲にこんな大きな利益はない』と云ふことをしばしば云つてゐた。

(16) 浦戸港の調査

高知縣の依頼をうけて博士は浦戸港の調査に出掛けた事がある。土佐は博士の墳墓の地であり、出生の地でもある。十一歳の少年時代に鄕關を辭して以來常に思出の地である。今こそ帝大の教授として、港灣工學の世界的權威として、普通ならば所謂錦を故鄕に飾るべき歸省であるが、博士は決してそんな形式的な勿體をつける人ではなかつた。

博士が浦戸港に着くと、縣の土木課長某氏其他はフロックコートに威儀を正して博士を出迎へた。先づ市内の旅館に案内して長途の勞を慰め、一日休養の上、ゆつくり調査方針を打合せる事にしてゐた。

處が博士は浦戸港に上陸すると、直に港内を視察して、出迎の課長其他を指揮し測量に取掛る事にした。君は向ふの處へポールを立てよ、誰は何處へチェーンを引けとか、指圖しながら博士自ら先に立つてやるので、以外に思つた一同も遂に意を決して、泥の上を走り廻つた。御蔭で手は泥だらけになる、フロック・コートは汚す、顏にまで泥をはねたが、然し博士の眞劍な態度に感激して誰一人不平を言ふ者もなかつた。

(17) 五百圓の電報爲替

小樽築港第一期工事竣工の際に、北海道長官の招待に依つて、博士は東京から竣工式に臨む事になつた。博士は誰よりも非常な喜と感激を以て前日其地に着いた。竣工式の催に就ては、以前から小樽市の有志等が後援して祝賀會を盛大にする事を申出てゐたが、何事にも御祭騷ぎの嫌な博士はそれ等の申出を一切拒絶してゐた。而して博士の理想通り質素を旨とし、來賓も極く少數知名の人々のみを招待し、これに要する費用も工事に直接關係あるものゝ外は全部博士の私財を投じたものである。

此の竣工式の時の事である。博士は御祭騷ぎは拒絶したものゝ工事費以外に竣工式の費用がなくては所員を勞ふべき何物もない、それは餘りに氣の毒である。十一年の歳月と幾多の人間の尊き努力に依つて完成された大工事の竣工式に、博士は何とかして自分の喜びを分たないわけに行かなかつた。そこで博士は東京の留守宅の夫人に貯金全部を送る樣に至急電報を打つた。突然の電報に夫人も一時不審には思つたが、博士に全的信頼を捧げてゐる夫人は早速郵便貯金五百圓をひき出して直ぐに電報

爲替で送金した。此より先すでに博士は密かに命じて竣工式の當日防波堤上にシャンペンと、赤飯と、小料理の折詰とを準備させる事にした。當日防波堤上に集まつた所員及び來賓一同は、豫期しなかつた此等の振舞をうけて多分の竣工式氣分に賑つたが、此費用が博士から出たものである事は當日誰も知らなかつた。

(18) 酒に呑まれる門下生

東京帝大が生んだ人物の中に某と云ふ人があつた。性來酒が好きでよく飲んだ。然し酒量は極めて少く、酒に呑まれ勝だつたので、酒の上の失敗が幾度ともなく繰返された。卒業後或る官廳に勤める事となつたが、酒の爲に技師にもせられず、遂には馘首の憂き目を見た。仕事は相當やれる方だつたが、皆敬遠主義をとり終には誰一人として構つて呉れる者もなくなつてしまつた。某はもはや頼るべき人がなくなつたので、とう〳〵博士のところへ轉げこんで、世話して下さいと泣きついた。博士は快く之を引き受けて或會社へ入れてやつたが、矢張り酒の爲に失敗して、其後七八回も職を替へたが、博士はその度毎に一々某の世話をやいてやつた。然も酒に呑まれる某は、仕事に就いてゐる間にも何かと博士を煩すことが多かつた。博士は

『酒を飲むのは好いが酒に呑まれるから困るね』と、少しも腹を立てたり怒つたりすることなく、何時までも面倒を見てゐた。

(19) 龜の行方を見屆ける

或時、博士は邸に龜を飼つてゐたが、不自由だらうと云ふので、之を本郷の大學構内の池に放した。其日の朝の事である。常に時間に正確な博士が、今朝に限つて未だ見えないと言ふので、大學でも心配し御宅へ電話をかけてみると、既に出かけたとの事で、どうした事かと案じてゐた。

然るに博士は大學構内の池の縁に茫然と佇んで、放した龜の行方に見入つてゐた。總ての生物に同情を以て對した博士が、何を考へ、何を祈り、斯くも無我の境にあつたかは知る由もないが、唯此朝初めて博士は授業時間に遲刻した。そして、それ以後は一回も遲刻した事はなかつた。

北海道帝國大學の倉塚教授が曾て食用として鶉を贈つた事があつたが、博士は之を何時までも料理させないで永く飼養してゐた事もあつた。

(20) 技術的良心

大正十五年十二月のこと、內務省に於て臨時港灣調査會が開かれ、博士も委員として出席した。その時小樽築港の第二期計畫が附議されて、博士の曾て計畫した港門を少し更へなければならぬ事となつた。その時博士は、『自分としては充分と信じてやつた仕事であるが、今日の港勢よりしては如何とも仕方がない、斯くなつたことは全く自分の責任である』と、單に港門を改良するに過ぎない小事に對しても、博士の責任感は之を許さないのであつた。

(21) 他人の意志を尊重

博士は口の惡いのでも有名であつたが、決して他人を傷けるやうな事はなく、他人の意志を充分に尊重した。或學生が卒業論文に函船（ボンツーン）を軍隊用の橋とする設計をしてゐたが、博士に『君これは敵を乘せるのか味方を乘せるのか』と揶揄されたので、其學生も嫌氣がさしたと見え、其計畫を止めようとした。處が博士の曰ふには、

『そんな事でどうするのだ君、そんな馬鹿な事をするものではない。人が何と云はうと構はずに初志通りぐん〳〵やり通さなくてはいけない』と。

又或學生が楕圓形井筒基礎の設計圖を畫きながら、博士に『先生、井筒基礎の形には、圓と楕圓形とどちらが好いのですか』と質ねた。博士は、

『圓でも三角でも信ずるものが好いのさ。君も信ずる所があるからこそ楕圓形の設計をしてゐるのだらうが』と云つて、人に云々されて、所信を翻すやうでは駄目だと戒めるのであつた。

(22) 設計ばかりが仕事ではない

阿部美樹志氏は外國で混凝土工學を專門として研究し、歸朝後鐵道省に職を奉じてゐたが、給料も安いし、ぐづ〳〵してゐるのが面白くないと云ふので、神田、萬世橋間の高架線設計の終了を期とし、鐵道を辭めようと思ひ、是を平常師事する博士に相談した。その時博士は

『設計が濟んだからつて仕事が終つたわけではあるまい。大切なのはこれからだ、若し僕だつたら給料なんか貰はなくともやつてるよ』と多くは語らないが、理の通つた話に阿部氏も深く感ずる處があつて『全くその通りです、よく分りました』と云つて博士の許を辭し、再び心に鞭打つて仕事を勵んだ。數年の後高架線工事も竣工したので再び博士を訪問すると、博士も微笑を湛へ『もう辭職しても好いかな』と云つて『設計だけする人はいくらもあるが完全に工事を遂行する人は少ない。設計よりは工事をまとめる事の方が大切だ』と諭す樣に呟くのであつた。

(23) 一流の皮肉

大正八年頃小樽から博士一行が船で稚内へ出張しての歸途に、留萌の防波堤外に碇泊した時の事である。其船は郵船會社の古い船であつた。そのうへ浪が高いので同行者の多くは大概船室に入つてゐた。博士一人は甲板で港の狀況を見てゐたが、傍に居た一人の一等運轉士が

『斯んな港は駄目だ』

と云つて頻りに非難してゐた。勿論傍の紳士が日本の港灣の權威者であらうとは知らない。默々と之を聞いてゐた博士は

『そんな詰らぬ事を云つてるより甲板でも洗つた方がよからう』

と唯一言、また他を云はなかつた。

大正九年博士が釜山築港を視察した當時、釜山の棧橋の方向が惡いとか、船着が惡いとか云ふ世評があつた。博士と同道してゐた朝鮮總督府の某大官も此の世評を聞いてゐたので、博士の傍に寄つて

『此の棧橋では船長がみんな閉口して居る』と云つた。博士は他の同行者を顧みながら

『そんな船長は取換へたら良からう』

と實に愛嬌のない言葉なので、大官は啞然として二の句が出なかつた。此も博士の如き技術的に確信ある人にして初めて云ひ得た事である。

(24) 病院を覗く

牛込臺町の傳道義會内に設けられてゐた外村(トノムラ)氏の施療院に、博士は年々五百圓宛寄附してゐる事は既に記した。博士は、それを心からの樂しみとしてゐた。それは博士邸から僅に三町程の道程なので博士は時々其處を覗きに行つた。

只覗くだけで決して病室などには入らない、何時も階子段の傍から顏を出して、覗くのであつた。其樣子がお可笑しいと云ふので、病院の人達は又博士が覗きに來られたと言つて評判してゐた。外村氏も面白い事に思ひ、或日例の如く博士が覗きに來た時、

『此方へ御這入りになつて御覽下さい』

と云ふと、博士は例の如く微笑を湛へながら

『婦人の先生ばかりだから此所で失禮します』

と云つて遂に施療室へは這入らなかつた。傳道義會の施療院の醫者は全部女醫であつたから、愼み深

い博士は遠慮したのであつた。

(25) 人の世話

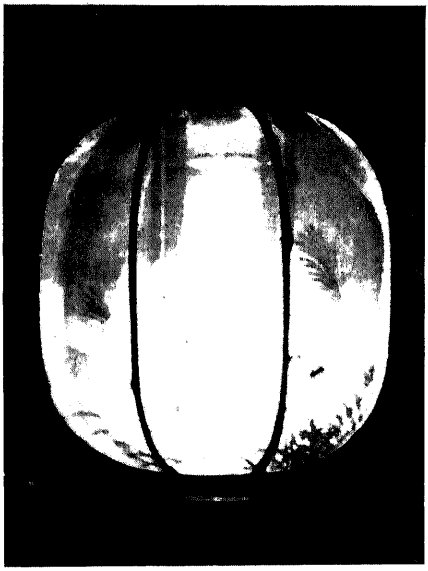
博士は人の世話をよくしたが、情實に捉はれる樣な事は全然なかつた。或人などは。五六回も反復して世話になつたが、それでも博士は嫌な顏もせずに、『そんな事では駄目だねえ』と笑つて又世話すると云ふ風だつた。

理性のすぐれてゐた博士は、その當人の適不適、長所短所をよく見て世話をした。例へば此の人間は斯う云ふ特質があり、斯う云ふ方面は得手だが、こんな處が劣つてゐると云ふ風に紹介するので、紹介された方は充分に其人の特質を利用し、安心して使ふ事が出來た。

(26) 師弟の情

燈火に仇なす浦の夕風も
何のそのとて笑ふ行燈

六十二翁　杜　仙



燈火は仏なり
清の夕風も
何のなごりのおもかげ
笑ひあり歌

六十二翁　廣井　功

十川嘉太郎氏に贈りたる行燈及短歌

杜仙とは廣井博士が自ら選んだ雅號である。此の作は十川嘉太郎氏に電氣行燈を贈つた時、名刺の裏に書いたものである。十川氏は前にも記した通り博士の古い敎へ子の一人であるが、當時は山口縣長府町に住み農に親んで居た。博士は平常から歌など作る人でなかつた。會々揮毫を乞はれる事があつても曾て筆を執つた事はなかつた。けれども不遇の境に在る昔の門弟を思ひ出しては作の巧拙等は問ふ處でない、かくも行燈を贈り、且つ歌をも添へられたのである。

此の行燈を受取つた十川氏は感激のあまり、行燈と歌を寫眞に撮り、製版して繪葉書とし、之を知友に頒つた。此所に掲げた寫眞がそれである。

(27) 舊情と手土產

人生に年老いて慰めの少い人ほど氣の毒なものはない、此種の人に對して博士は知ると知らざるとにかゝはらず、多大の同情を寄せてゐた。かつて權門を叩く事のなかつた博士でも、もと世話になつた名士で老後慰めの少い生活をしてゐる人の處には時々訪問する事があつた。藤波言忠子爵の處などには例年、年の暮に行く事にしてゐた。山內提雲氏なども年寄つて話相手がなかつたから手土產など迄用意して訪れた。其手土產なるものが、煎餅でも、鹽鮭でも何でもかまはない、其所らで間にあふ

ものを持つて出かけた。

それは如何にも無頓着な樣でもあるが、又一面には中々氣のつく人であつた。博士が外國から歸朝の際には必ず何か土產を持つて歸つた、其品物は多くは永久に殘る樣なもので、カフスボタン、煙草入、デヴァイダー、その樣な物は今でも博士の記念として保存してゐる人が澤山にある。

(28) 製圖

工學技術に關しては、殆んど往くとして可ならざるはなかつた博士ではあるが、中にも製圖は、殊の外得意であつた。

札幌農學校教授時代のこと、或る日博士が自分の控室で北海道鐵道の標準鐵桁を設計してゐたが、寫布に直接描き、烏口やコムパスの使ひ方が迅速にして巧妙を極めてゐた。學生等が傍で見てゐると博士は、『此の位早く書かなきや米國邊ではドラフトメンとしてパンには有りつけぬ。計算でも間違つたが最後一日二日の仕事は全く水に流されるのだ。エンヂニアとなるには先づドラフトメンを卒業せねばならぬ』と獨り言のやうに呟きながら學生に諭すのであつた。

當時の北海道參事官であつた白仁武氏などは、博士の此の技能にすつかり感心させられて、會ふ人毎に『廣井と云ふ男は恐ろしく製圖の早い男だ』と云つてゐた。

自分がそうであつた計りでなく、自然學生にも製圖に重きを置く樣にさせた。けれども其は實質的の製圖の事で、毫も飾氣等に意を用ふることを好まなかつた。輪廓などを叮嚀に書いてゐると、『乞食が表付きの下駄をはいてるやうだ』などゝ皮肉を浴せたり、餘りギリ〳〵に計算された華奢な橋梁の圖面等を見ると『こんな橋では烏がとまつても墜ちるぞ』と云つて是を戒しめると云ふ風であつた。そしてそんな時には、

『エンヂニアには墜ちる橋を架けるのが六ケしいものだ』と一流の警句を吐いたものである。

(29) 一本の線

北海道鐵道に於ける釧路港聯絡は其當時の工務課長大村卓一氏が、トンケシ方面を埋立てる計畫を樹てゝゐたが、或日博士が工務課長の部屋を訪れて、釧路の圖面を見乍ら、

『之は此方の方へ持つて行つたらどうか』と鉛筆で線を一本入れた。それは大村氏の計畫とは反對側を埋立てると云ふ意味であつた。それが最初の設計となつて、其後幾度か變遷してはゐるが、博士の提案は今日の釧路港聯絡の基礎となつたのである。

博士はどんな難しい事に對しても、卽座にある直感的暗示の閃くものがあつたのである。

(30) エンヂニアの資格

博士は學者ではあつたが雄辯家ではなかつた。教授時代にも演壇に立つて熱辯をふるふなどと云ふことはしなかつたが、無言の間によく人を指導する力を持つてゐた。つまり言葉で諄々と諭すよりも、行を以て悟らすと云ふのが博士の一面であつた。然し座談は極めて巧みなもので、友人仲間や後輩などは、よくその座談を所望したものである。すると博士は何時も特有の諧謔を交へ乍ら快く話すのであつた。或時などは、

『技術者で色んな手ずるを求めたり妙な處をくゞつて職を求め、何々課長になつたとか、局長になつたとか云はれてゐる人もあるやうだが、そんな人はさぞ寢心地が惡いことであらう。工學者たるものは自分の眞の實力を以て、世の中の有像無像に惑はされず、文明の基礎づけに努力してゐれば好いものだ。だから又工學者たるものは、達觀の利くものでなければならん』と。

(31) 禮儀

博士は、衣服とか風裁等はちつとも構ひつけなかつたが、禮儀は極めて正しいものであつた。着流しで訪ふものがあると、後になつて彼も駄目だと呟いてゐた程である。

博士が婚禮の宴席に出席される事は極めて稀であつた。唯蔭ながら之を祝福してゐたばかりであつた。然し知友門人の葬式には出來るだけ之に參列した、博士は

『葬式は其の人との此世に於けるお別れの大儀であるから是非共之に參列しなければならない』と云つて、何時も道を遠しとしないで、親しく其柩前に心からなる別を惜み、又其の冥福を祈るのであつた。淺野總一郎氏が其の糟糠の夫人を失ふた時、第一に之れを弔問したのは博士であつた、然も博士はそれ迄決して淺野氏を訪問した事もなく、又招待されても仲々之に應ずる人ではなかつた。

博士は又宮中の祝賀の御招宴にはいつも御遠慮申し上げてゐた、それ故博士は大禮服の要を認めなかつた。明治大帝崩御の際には大禮服がないために、陛下の御大葬を奉送しないでは申譯がないと早速之を新調された。

然し博士は決して形式的の禮儀を守つてゐた譯ではない。虛禮は徹底的に之を排斥した人である。だから正月になつても年賀に廻る等のことは餘りしなかつた。年賀狀の如きも貰つたものへ返事を出す位であつた。その返事は葉書に印刷した年賀狀へはどう、奉書へ書いたものにはどうと云ふ、確然

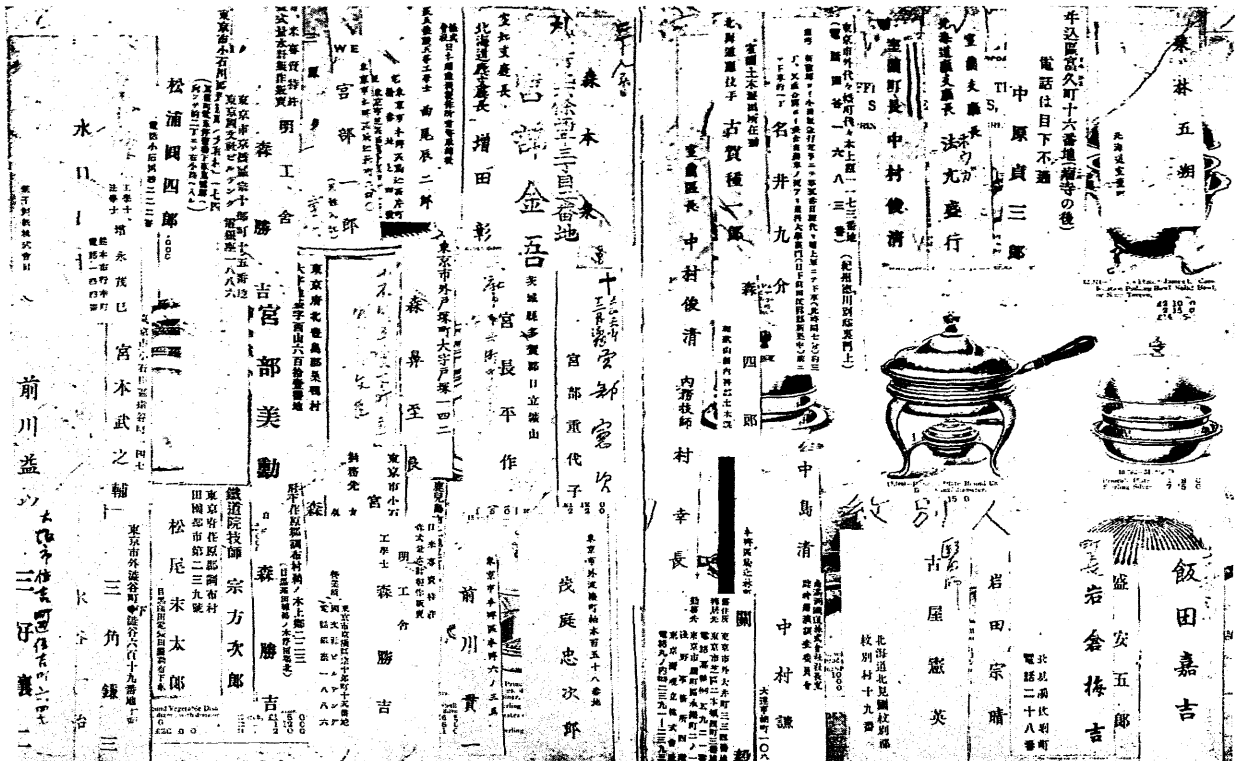
たる區別をつけて之れをアルハベット順に筆記帳に記入し、最近十年間の年賀狀受信、發信を一目瞭然たらしめてゐた。又博士は普通の手紙には受取ると直ぐ必ず返事を書いた。それがどんなつまらない手紙でも決して握りつぶすと云ふことはしなかつた。之は博士の處へ面會に行つても、決して人を待たせないで、博士自ら先に應接間へ出て待つてゐたのと好一對でもある。

(32) 時代遲れの紋付と洋服の裏返し

博士は中島鋭治博士とは年來の懇意で、よく訪ねたが、博士は何時も大きな紋の付いた、古ぼけた羽織を着て行くので、或時中島博士が『そんな大きな紋付は昔物で今時はやらんよ』と云ふと、博士は『そうかな』と平氣な顏をしてゐるので、中島博士も張合抜けしたことであつた。

上海港の技術會議へ日本代表として出席する時は平常服裝に無頓着な博士も國家の名譽に拘ることを恐れて早速白木屋を呼んで洋服を新調した。其時『襟に餘計な孔を明けないでくれ給へ』と云ふので、店員が不思議に思つて聞き返すと、『いや裏返しの時都合が悪いからさ』博士は素氣なく斯う云ふので店員も驚いたと云ふ。

博士は何時も『着れるものを體裁が悪いと云つて着ないのは却つて不體裁な話だ』と云つて、洋服



古カタログを利用したる博士の名刺貼付帳の一部

は必ず裏返さして二度着るやうにしてゐた。

すべてが此調子だから、風裁は極くヂミで、屬官を連れて地方を視察してる時など、宿屋の者が博士の風裁を一目見ただけで、博士を小さな部屋へ押し込め、屬官を立派な部屋へ案内して、とんだ喜劇を演ずると云ふ樣な事も珍らしくはなかつた。

(33) ポケット・ブックを讀む

博士は何時も、

『ポケット・ブックは自分のものにせなくちやいかん』と云つて、トロートワインのポケット・ブックなどを旅行中も離さず、熱心に讀んでは感想や批評などを書き入れてゐた。ヒュッテのポケット・ブックにも赤インキで書き入れたのがある。また大英百科全書等を買入れて、それを片端から讀むと云ふ有樣である。辭書やポケット・ブックを讀む人は餘り澤山はあるまいと思はれる。

(34) 贈物を受けるのは迷惑

博士は、土木工學の大家として、顧問又は囑託と云ふ樣な名目の下に、各方面の公私の事業や工事

に關與する處が多かつたから、方々から贈物を受けた。博士は常に此等の贈物を謝絶してゐたが、それでも置いて歸る者が多かつた。

牛込の宅は、二階が博士の應接室になつてゐるが、夫人が昇つて見ると、時として隅の方に反物等置かれてある事がある。そんな時夫人が、

『一體此はどうした譯なのです』と質ねると、博士は無雜作に然し迷惑相な顏をして、

『あゝ斷つたんだが誰か先刻置いて行つてしまつた』

と答へるのが常であつた。

他人から斯うして贈られる物は、大低博士自身に依つては手も付けられた事はなかつた。博士はその貰つた物の善し惡しは勿論のこと、時として品物が何であるかさへも調べずに、その次に來た人に與れてやるのが一種の習慣の樣になつてゐた。博士は誰が持つて來た、どんな物だと云ふ事さへ念頭には置かなかつたから、持つて行つた當人が、その次再び博士を訪ねて、前に自分が持つて行つた品物を、其まゝ博士から頂戴して歸ると云ふ樣な滑稽も、時々演ぜられた。

博士は他人から物を貰ふ事を徹底的に嫌つたが、人にやるのは好きだつた。然し品物の善惡とか、値段の高下等には少しも頓着はしなかつた。

卒業生などが訪ねると博士は自分が考案したコンパス等を與へた。また卒業生のうち洋行する人で、外國の知名の士へ紹介狀を書いて頂き度いと云つて來る者が多かつたが、博士は一々親切に書いて與へた。それが餘り度々なので博士はその紹介先に贈物をしてゐた。

(35) 宴會

名利を眼中に置かなかつた博士は、招待會とかその他の宴會へは殆んど出席した事がなかつた。博士の顏が見られる宴會と云へば、工學辭典の印稅を費用として春秋二回帝國大學の土木教室で開く教官の懇親會か、土木學會の晩餐會位なものである。

明治二十三年に北海道鐵道が、岩見澤から空知まで竣工し、其開通式に長官永山中將が臨席する事になり、博士も其一行の一人であつた。長官の臨席と云ふので鐵道會社の方では汽車の中で種々御馳走をする騷ぎ、ブランデーか何かを拔いて皆盛んにやつたが、博士は他の室に逃げ出した。

川島氏が新に長官となり北海道に赴任した時、或る日某氏を通じて博士と晩餐を共にしながら御高說を伺ひ度き旨を申し入れた。普通の人なら『そうですかそれはどうも』と云つて早速出かける處だらうが博士は、

『飯は腹一杯食べて居るし高説もない、御馳走も欲しくないから、それには及ばない。』と斷つてしまつた。

又東京から室蘭の築港視察に出張した時、技師連が數名（中村廉次、三浦宇三郎氏等）博士の旅宿を訪ね、

『これからお供をして何處かで晩餐を頂き乍ら、御高説を拜聽したいと存じますが』

『それは大變結構な事だ、早速此處で開かうぢやないか』

と云つたので、技師連も返事にまごついた事もあつた。

大正八年稚内に行つた時などは、豫め知らせて置いたので、役場では歡迎のため先づお茶を出す、それから菓子を出す、林檎を出す、コーヒーを出す、おしまいになつてから西洋料理を出すと云ふ風だつたので、博士は傍の伊藤技師に向つて、

『斯う逆に出されては叶はんね、乞食ぢやあるまいし食物まで振舞つてもらふ必要がないな』と云つて、その後斯うした時には必ず伊藤氏等に、

『君代りに行つて來給へ』と云つて自分では出席しなかつた。

斯の樣に博士は常に卒直であつたから、何人にも誤解されたり、疑はれたりした事が嘗てなかつた。

(36) 鼾

博士の鼾は、有名であつた。然し鼾が大きいと云ふ話が出ても博士は、『他人は皆そう云ふが自分ではまだ聞いた事がない』と云つて濟ましてゐた。博士の鼾は文字通り雷の如くで、若い時分からのことらしい。博士がまだ米國にゐた頃隣室の婦人が終夜鼾聲に惱まされて、憤慨し、靴で博士の戸を叩いて呼び起したと云ふやうな話が殘つてゐる。

原敬氏が内務大臣の頃、留萌と增毛に於て築港の爭奪が起つた。其時博士は市瀨内務技師等と共に實地調査の爲に小樽から留萌に向つたが、留萌行の一等寢臺の上段は市瀨技師、下段は博士が占領した。處が、夜の更けると共に熟睡した博士の鼾聲は愈々高くなつて、市瀨技師は終夜睡つかれなかつたと云ふ。他の者は博士の鼾を知つてゐたので豫め別の車におさまつてゐた。

また第一回の土木學會視察旅行で足尾に行つた時、博士と同宿した近藤虎五郎氏も、博士の鼾に苦しめられて遂に睡られず、歸途車中でその話をすると、博士は卽吟して曰く、

弱虫が我が鼻息に驚けり

同じく第二回土木學會視察旅行に日立へ行つた時は、先輩として野村龍太郎氏と博士が二人別室へ

案内された。野村氏も亦博士の鼾の爲に終夜一睡も出來ず、南無阿彌陀佛を唱へて夜を明したと云ふ話もある。

斯う云つた具合だから、博士を知つてる宿屋などでは、大てい博士を別室へ案内したもので、『函館の勝田（舊の勝田屋旅館）へ宿ると何時も僕には敬意を表して三階の一室へ入れて呉れるので、眺めは好いし、靜かではあるし、至極結構だと思つてゐたが、三階だから出入りに不便でね、然し敬意を表して呉れるのだから敬意は不便なものと我慢してゐたが、考へて見ると敬意は僕にではなくて鼾になんだよ』と云つて大笑ひした事があつた。